

発達障害児をもつ母親の育児感情

- 夫婦の育児行動における協力関係に着目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
溝部 恵

本研究は、発達障害児をもつ両親の育児感情を明らかにすることを通して、両親がともに協力しやすい育児環境を促進または阻害する要因を検討するため、両親に質問紙調査を行った。また、母親に面接調査を行い、発達障害児をもつことで母親一人ひとりが置かれた状況や、受け止め方の特性を明らかにすることを通して、母親の心理面の安定を促進・阻害する環境要因についての考察を行った。

研究 では、父親の育児行動を母親がどのように認識しているのか、また、父親のどのような育児行動が母親の育児感情に関係しているかについて検証を行った。その結果、母親の半数が父親の育児行動を肯定的に捉えているにも関わらず、多くの母親が育児に対して夫婦間で距離を感じているとの傾向が示された。父親が専門家と話をするなど第三者から意見を聞く機会が少ないと母親が捉えていることから、夫婦間で話し合いをする際には、お互いの認識の差が前提にあり、それが関係していると考えられた。また、父親の育児行動の中でも、「間接的な育児行動」と母親の育児感情の「前向きな捉え方」に有意な相関がみられ、母親を精神的に支える父親の育児行動が、母親に自信をもたせて育児に向きあうことを促すと考えられた。また、専門家による肯定的な評価は母親の育児を前向きに促すことが考えられた。

研究 では、父親の育児行動に関する父親と母親の認識にずれが生じるかどうかについて検証した。また、父親が母親の育児行動をどのように捉えているかについても検証した。その結果、母親と父親の認識が必ずしも一致しているとは限らないことが明らかとなった。また、父親は母親の育児に対して、肯定的な評価をしており感謝の気持ちを強くもっていることが明らかとなった。しかしながら、その思いが母親には伝えられていない場合が多いことが考えられた。

研究 では、発達障害児をもつことで母親一人ひとりが置かれている状況や特性の捉え方を明らかにするとともに、育児過程を検証した。その結果、母親の周囲にいる理解者の存在が、母親の安定度の促進に関係していることが示された。また、診断の告知というスタート地点から病院への繋がりが母親のみである夫婦が多いことが示された。父親は母親のフィルターを通して情報を得ることが大半であり、そのような状況は、父親自身が納得して行動に移すことを難しくさせていると考えられた。

夫婦が足並みを揃えて育児に向き合うことを促すためにも、専門機関は、父親にも第三者の意見を聞く機会を工夫するなどの配慮が必要だと考えられた。